受験番号

広島市立看護専門学校　第一看護学科

令和六年度　推薦入学試験問題「国　語」

【試験上の注意:答えはすべて解答用紙に記入すること】

一　次の文章を読んであとの問いに答えよ。

ことばは、子どもをどのように変えるのだろうか。ことばを覚えることで、コミュニケーションが可能になる。[A]、子どもが得るのは、コミュニケーション能力だけではない。

私たちは、自分の家にいるペットのネコが他のネコと違うことは、もちろんわかっている。今あなたの三毛ネコ「ミケ」があなたのひざにのっていたら、庭に見える、家のネコと見分けがつかないほどそっくりなネコが、家のミケではありえないと考える。それは同じ[I]において、別の空間に同じ個体が同時に存在し得ないことを知っているからだ。

今度はあなたの目の前からミケがいなくなり、ミケが見えなくなったほうから黒いネコが現れたとしよう。あなたは黒いネコがミケだと思うだろうか。そうは思わないはずである。ミケとその現れた黒い猫は、明らかに見た目が違うからだ。つまり、私たちは「同じ個体」であるという[II]に、時空間上の(a)制約と見た目を両方使っているのだ。

二匹を同時に見なくても、私たちは見た目の違いから、それが二つの別の個体であることがわかる。しかし同時に私たちは、(1)その二匹のネコがともにネコだから「同じ」であるとも思う。ここに、見た目はネコに似ている小型のイヌ(例えばチワワ)が登場したとしよう。そのとき、私たちは黒ネコが三毛ネコと「同じ」であるのと同じように、そのチワワも先ほどの三毛ネコと「同じ」であるとは考えない。チワワはイヌだから「違う種類の生き物」だと考える。そして、三毛ネコと黒ネコは同じような生物学的特性や行動特性を持つが、チワワは違う特性を持つ、と考える。

[B]、私たちは「同じ名前がつく同じ種類のモノ同士」を「同じ」であると考える。しかし、同時に、ネコ二匹もチワワも、ともに(b)哺乳動物なので、何らかの同じ特性を共有しているはずだとも考えるのである。

幼児も私たちと同じように考えるだろうか。例えば、三歳から五歳くらいの子どもにウシの絵を見せるとしよう。続いて、ブタの絵とミルクの絵を見せる。そして、子どもに「これ(ウシ)と同じ種類なのはどっち?」と聞く。すると、子どもは多くの場合、ミルクの絵が「同じ種類」だと言う。ウサギの絵を見せて、同じなのはどっち、と聞き、ニンジンとネコの絵を見せる場合にも、ニンジンを選ぶ子のほうが多い。子どもはもともとウシとミルク、ウサギとニンジン、サルとバナナ、というような連想関係にあるモノ同士を仲間と考え、「同じ」であると言う傾向が強い。

しかし、例えば、「怪獣語ではウシのことをネケと言うんだよ」と子どもに教え、ブタとミルクの絵を見せて、「どっちがネケ?」と尋ねるとする。(2)すると、「同じ種類のモノ」を選んで、と言われたときはミルクを選んでいたのに、同じ年齢の子どもが、こんどはブタを選ぶのだ。

受験番号

　子どもにとって、ウシとミルク、サルとバナナのような連想関係はとても［Ⅲ］である。［C］、単に「同じのはどっち?」と聞かれると、連想関係にあるモノを選ぶ。しかし、ラベルに関しては、ウシとブタのような、同じカテゴリーに属するモノが同じラベルを共有する、と考え、サルとバナナのような連想関係にあるモノ同士は、同じラベルを共有しないはずだ、と考えているのである。

　私たちは世界を様々にくくり、分類していくことができる。食べ物、道具、食器、植物、動物などのように概念を(c)階層的に整理して分類することもできるが、「赤いもの」、「固いもの」、「丸い形をしたもの」のように、ある特徴によって分類することもできる。あるいはウシとミルクのように因果関係、サルとバナナのように連想関係で、モノ同士をまとめていくことも可能だ。

　(3)このように、いろいろな基準でいろいろな分類が可能な中で、大人は「同じ種類」と言われると、ウシとブタのような同じ概念カテゴリーに基づくモノ同士が「同じ種類」だと考える。それに対して、子どもは、モノ同士の関係のあり方として、因果関係、連想関係、同じ属性を持つ関係、同じ材質からできている関係など、様々な基準での「同じ」が存在することに早くから気づいているのだが、どの「同じ」をいつ使うべきなのかがわからないのだ。しかし、ことばの存在により、ことば(名詞)によってラベルづけされる分類の仕方、つまり［α］に従った分類が特別な分類だ、ということを学習していくのである。

　だが、考えてみると、［D］、名詞によってラベルづけされる分類の仕方がなぜ特別なのだろうか。これを考えるために、例えば「植物」に属するモノたち、「サルとサルの好きなモノ」たちと「赤いモノ」たちをそれぞれ考えてみよう。その中で、お互い同士の［Ⅳ］に最も意味があるのはどれだろうか。

　例えば、ある植物の根には〇〇という、有毒の物質が含まれている、ということを経験的に学んだとしよう。そのとき、人は、その植物自体を食べないように気をつけるだけではなく、それと「同じ種類」のモノも避けたほうがよい、と考える。では「同じ種類」は何を手がかりに探したらよいのだろうか。その植物の花と同じ色のモノすべてなのか、その植物に寄生する虫なのか、それともその植物と同じカテゴリーに属する植物なのか。このように、ある特定のモノにある属性があるとき、その同じ属性が他のモノにも共有されているかどうか推論することを「帰納推論」という。人の思考の中で、帰納推論はもっとも重要で、もっとも(d)頻繁に行われるものである。私たちはあるモノの属性が、それと「似たモノ」あるいは「同じ種類のモノ」と共有される可能性が高いと考え、直接経験しなくても、モノの属性について推論し、［Ⅴ］するのである。

　［β］は、知識も経験も大人に比べて少ない幼児にとって、とりわけ重要である。しかし、知識が少ない子どもにとって、「同じ種類」のモノを決めることは容易ではない。「同じ」というのは(e)曖昧で、いろいろな基準で、様々な「同じ」が可能だからだ。しかし、ラベルを持つのは概念カテゴリーで、「赤

受験番号

広島市立看護専門学校　第一看護学科

令和六年度　推薦入学試験問題「国　語」

【試験上の注意:答えはすべて解答用紙に記入すること】

いモノ」「サルとサルの好きなモノ」のようなカテゴリーは通常、単語のラベルを持たない。したがって、ラベルを共有しているモノ同士は同じ属性を持つ、と考えれば、実際にモノについての経験や深い知識を持たなくても、あるモノにXという属性がある、と知れば、それと同じラベルを持つ他のモノに、その属性を［Ⅵ］。

　このように、ことばを介して、子どもは直接経験したり教わったりしていないモノにどのような属性があるかを帰納推論によって学習し、概念を構築していくのである。つまり、ことばは子どもが自分で概念を学習し、大人の持つ概念構造を自らつくり上げていく際に、大きな役割を果たす。（4）ことばが存在しなかったら、幼児が素早いスピードで概念を学び、効率よく概念体系をつくり上げていくことは不可能なのである。

（今井むつみ『ことばと思考』岩波新書、二〇一〇年　作題のために省略した箇所がある）

問一　空欄［A］～［D］を補うのに最も適当な語を、次の（ア）～（オ）の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

（ア）すると　（イ）そもそも　（ウ）しかし　（エ）つまり　（オ）だから

問二　空欄［Ⅰ］～［Ⅵ］へ入れるのに最も適当な語を、次の（ア）～（エ）の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄［Ⅰ］　（ア）間断　（イ）合間　（ウ）隙間　（エ）瞬間

空欄［Ⅱ］　（ア）事実　（イ）同化　（ウ）認識　（エ）納得

空欄［Ⅲ］　（ア）共感的　（イ）魅力的　（ウ）論理的　（エ）平凡的

空欄［Ⅳ］　（ア）共通性　（イ）普遍性　（ウ）特殊性　（エ）意外性

空欄［Ⅴ］　（ア）観察　（イ）変化　（ウ）予測　（エ）直観

空欄［Ⅵ］　（ア）判断できる　（イ）帰納できる　（ウ）演繹できる　（エ）証明できる

問三　波線部（a）～（e）の読みを記せ。

問四　傍線部（1）「その二匹のネコがともにネコだから「同じ」であるとも思う」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を用いて、具体的に説明せよ。

問五　傍線部（2）「すると、「同じ種類のモノ」を選んで、と言われたときはミルクを選んでいたのに、同じ年齢の子どもが、こんどはブタを選ぶのだ」とあるが、それはなぜか。簡潔に説明せよ。

受験番号

広島市立看護専門学校　第一看護学科

令和六年度　推薦入学試験問題「国　語」

【試験上の注意:答えはすべて解答用紙に記入すること】

問六　傍線部（3）「このように、いろいろな基準でいろいろな分類が可能な中で、大人は「同じ種類」と言われると、ウシとブタのような同じ概念カテゴリーに基づくモノ同士が「同じ種類」だと考える」とあるが、「子ども」はどうであるのか。簡潔に説明せよ。

問七　空欄 α ・ β に入る言葉を、本文中から抜き出して書け。

問八　傍線部（4）「ことばが存在しなかったら、幼児が素早いスピードで概念を学び、効率よく概念体系をつくり上げていくことは不可能なのである」とあるが、それはどういうことか。「効率よく」の意味を明らかにしながら、具体的に説明せよ。

二　次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に直せ。

「懐かしい、私、ずっと追いかけていた夢小説作家さんがおって……『夜もすがら』っていうサイトなんやけど。」

今度は私が小さく声を上げ、私も「夜もすがら」にくるっておりました、と口元を①オオった手の隙間から溢す。えっすごい、②キセキ？　こんなことある？　でも、だって、あれは二次創作ってより、もはや文学の域っていうか……。いや、ほんとそう、文学。えーちょっと、今もサイト生きてるかな、と③ハシを置いてから互いに声を潜めながらはしゃいで、盛り塩さんのスマホから「夜もすがら」のサイトにアクセスした。スマホ対応のために夢小説作成のUIそのものが変更され画面が広がり読みやすくなっていたが、トップページを見るに二〇一一年の秋に読んだ長編連載三回目を最後に、ブログ含めすべての更新が④トダえていた。ｒｉｃｏさんもジャンル変えちゃったかねえ、と盛り塩さんは名残惜しそうに、スマホの液晶に指紋を⑤スりつけるようにゆっくりとサイトを閉じた。

（出典：児玉雨子『##NAME##』　河出書房新社　二〇二三）